

【翻訳】

## 夜道<sup>①</sup>

鉄 凝原作・池澤 實芳訳

挿隊する前、夜に都市の大通りを歩く時、歩きにくいなんて思ったこともなかったし、足取りだつて右左平均していた。ところが甜<sup>テイ・シツン</sup>村に来てみると、事情は違つてしまった。暗い夜、深い凹みがあったり、高く盛りあがっていたりする、でこぼこの小道に足を踏み入れたとたんに、足元がおぼつかなくなつてしまった。歩きだすと同時に、「きやあー、助けてー」という金切り声をあげてしまった。しかし、夜道を歩くのが恐れれば恐い分だけ、私は度胸があることを示そうとして、生産小隊に新しく成立した灌漑専門班に参加した。灌漑は夜昼関係なしに行なわれるのだ。

灌漑専門班の結成は、私たちの隊長の発案だった。老支部書記が民主派の窓際族と確定されたばかりだし、数人の支部委員が各生産隊に機械を停める、批判するぞと騒いでいるところだし、あんたのところろで専門班を作つて、早出・残業で働くなつて、生産で革命を押さえつけるというレットルを貼られるのが恐くないのかい、と当時彼に忠告する人がいた。だが隊長は気にするふうもなく言った。「日照りで、カラカラにあぶられてるつてのに、そんなよけいなことを考えている

暇があるつてのが！」そこで、すぐに灌漑班が活動しはじめた。

私たちの灌漑班の要員は、全部で二十七人だった。一名の機械操作員と女性一名の畦見張り員からなる三人一組に分けられた。正午、私は隊へ組分けの結果を聞きにいった時、娘たちはみな私にささやいた。「あんたは我慢できねえべな。ここに来てまだ数日しかたつてねえんだがら。昼も夜も関係ねぐ働くことになつたらよ！」

「夜の班になればよ、うね溝におつこつてケエルの餌になつちまうんでねえのが！」

そんな話に聞く耳をもたない私は、私は誰と組むことになつたの、と真つ先に隊長に聞いた。私たちの班は、機械操作員が二升<sup>アケシヨウ</sup>で、私と榮巧<sup>ロシチヤク</sup>の三人だと、隊長は私に言った。隊長が言いおわると、なぜか、娘たちはまず互いに顔を見合つてから、次に私をちらつちらつと見た。まるで私たち三人の班に対する私の態度を観察するかのようになり、もちろん私は何も言えない。しかし二升はいたりきたりしながら、ぼそつと言つた。「あいつか、あいつか……」でもその後の言葉は何も言わなかった。

あいつとは、当然栄巧を指す。いま彼女はここにいない。他の班の臨時要員として、彼女は村の北で灌漑しているところだった。私と彼女は一つの班になったのだから、まずは彼女を探しにゆかなくてはならないし、ついでに今日の任務を彼女に伝えなくてはならない、と私は考えた。

何としたことか、私が村の北に行った時に、彼女は何人かの男の子と冗談とも本気ともつかないような喧嘩をしていたのだ。全身に水を跳ねあげ、大声で罵っていた。

「恥ずかしくねえのが。うね溝の水に照らして見でみろや！おらの弟と尻にもなんねえことぐれえで喧嘩したがらつてよ、お前ら、おらとこのうね溝に八つ当りに来たつてのがよ。おらの弟をめぐつて、あいつをずたずたにする腕前がねえんでねえのが。そうしたがらつてよ、誰も何とも言わねえぞ。勇気があんなら、もう一度おらのうね溝のくろを突つてみるや。おらつちにや水ならうんとこさあるだぞ！どうなるか、見でるよ！」彼女はそう言いながら腰をまげて、ごぼごぼと噴き出ているゴムホースを抱えあげて、その子供たちのほうに向けて。子供たちは飛びあがりながら、ゴムホースの届かないところまで逃げてゆき、振り向いて怒鳴った。

栄巧の糞つたれ、プーカプカと

道に立ってラツパ吹く

便所紙で、窓を貼り

足洗いの水を、カボチャにかける……

子供の怒鳴り声を聞いて、栄巧は仏頂面になり、手に持っていたゴ

ムホースを「ポトッ」とうね溝の中に投げ捨てた。彼女は遠くで飛び跳ねている小さな人影を眺めながら、何かぶつぶつ言った。すると、いきなりぎゅつと口を結んで、鉄シャベルを掴み取るや、子供たちに故意に突き開けられたうね溝を塞いだ。それからすばやく、腰よりもちよつと背の高いトウモロコシ畑に頭からもぐつて、未完成の畦のくろを固めて形を整えはじめた。彼女は腰をまげて飛ぶがごとくに前の方へ土を固めてゆく。彼女の背後で干涸びた地面から土埃がたちのぼった。土埃が消えると、まっすぐで、端正な新しい畦のくろができあがった。

「栄巧！」と私が大声で呼びかけたので、彼女はようやく立ちどまった。そして目を細めて私のほうを眺めた。彼女を呼んだ者が私だとわかると、ようやく畑の端まできて私を迎えた。

彼女の顔は、白かった。どんなに日焼けしても黒くならない皮膚の持ち主なのだろう。眉は幅広く黒くて、元気があった。二本の長いおさは太かったが、平均に分けられていないせいか、不揃いに肩に載っていた。ズボンの裾が気ままに折り曲げられ、太いすねと大きな足が露出していた。

「あんたとおらは同じ班だべ。そうなんだべ？」彼女は私を見て笑って言った。すでに私の来意がわかっていたので。

「それから二升も」と、私はつけ足した。

「誰だつて？」

「二升よ！」

「あいつか。ふん！」

さつきは二升が「あいつか、あいつか」と栄巧のことを言っていたが、今度は栄巧が「あいつか、あいつか」と二升のことを言った。

私はさきほどまで二升のことを聞いてみたいと思っていたのだが、その前に栄巧のほうが先にしゃべった。

「今晚、灌漑するんだべ？」

「ええ。村の西のトウモロコシ畑をやるのよ」私は彼女に言った。

「んなら、晩飯食つたら、おらがあんたを呼びに行くがらな」彼女は言った。

私はちよつと考えて言った。「村の西に灌漑するんだし、あなたの家も村の西だから、やっぱり私があんたを呼びに行ったほうが、無駄がなくていいわ」

「あんた、おらを呼びにどこさ行くって？」

「あなたの家よ！」

「ほんとうけえ？」

「ほんとうよ」

「ほんとうけえ？」彼女はもう一度尋ね返した。

「私、誓つてもいいわ！」焦つてしまい、私はこんなことを言つてしまった。それで栄巧はしばらくけらけら笑つた。学生はよくそんなふうな口のききかたをする、と彼女は言つた。

私は村に来てまだ数日しかたつていないが、栄巧の家のことを話題にしていた人々の話をおぼろげに聞いたことがある。人々が彼女の家のことを話すのは、いつも何かの笑いの種にしているようなふうだつた。その話の中で一番多かったのは、彼女の家の中には入れない、汚くて足を踏み入れる余地がない、ということだつた。私は知っている。栄巧の父親は病死したこと、母親は非常にだらしがない人だということ、四十歳前後なのに、髪の毛をばさばさにして、日がな一日道端に出てへらず口をたたいている。栄巧はシコウと呼ばれているが、実は

彼女は長女である。その下に弟が三人いる。彼女の年齢は私とほぼ同じだが、すでに家の重責を担っている。農作業をするのは彼女だし、炊事や後片付けも、家畜小屋から肥料を掻き集めるのも肥を取るのも彼女がやるのだし、一家の針仕事も彼女がやる。それらのために、中学にも進むことができなかった。彼女はたくましい身体のおかげで、仕事ぶりは疾風か稲妻のようにすばやい。しかし、彼女は口は達者ではないのに、よく人のあらさがしをするし、お洒落をする暇がないので、一部の娘たちは彼女といつしよにいたくないと思つている。栄巧は一言で相手をまるまる三日間も黙らせてしまうことができるし、いったん栄巧の家に入ったら、家に戻つてきてから三日間は吐き気がおさまらなくなつてしまふ、と彼女たちは言う。この後のほうの非難は、栄巧の母親に対するものだが、しかし、栄巧の家を訪問する者は、これまでほとんどいなかった。

たぶん正午に私が栄巧に誓つたためか、彼女は私が本当に彼女の家へゆくことを信じたようだ。だから、私が夕飯を食べて、彼女の家の表門に近づくやいなや、すぐに力強い両手でつかまれて門の中に引き入れられてしまった。それは当然、栄巧の仕業だつた。私たちはいっしょに家の中に入った。家には彼女だけしかいなかった。家の中にはまだ新鮮な土の匂いが充滿していた。いままで掃除をしていたのだとわかつた。彼女は私をオンドルに押しつけた。それから鏡台の小さな抽斗の中から小さな紙包みを取り出して、言った。「よその家じゃ、あんたを落花生や、山藁筋兎の油炒めでもてなすかもしんねえ。山藁筋兎の油炒めは、都会の江米条にも劣らねえもんだ！けど、おらんちにはねえんだ。おらの家にあるのは、一包みのお茶だ。去年、大工さんに屋根を取り壊してもらつた時に、人に頼んで高碑店「保定地区の東

北部の新城県の人民政府のある鎮名。北広線の停車場でもある」から買ってきたもんだ。飲んで見ろや。まだ味があるべ。」彼女はそう言いながら、包みの半分のお茶の葉を洗ったばかりの急須に入れ、お湯を入れ、粗末な磁器製のお碗を数個並べ、一碗一碗猛烈な勢いで注ぎだした。黄金色のお茶が碗の中で渦を巻きながら外にこぼれた。気温が高いので、汗が多く出る、私がうね溝の水を飲み慣れていないから、一晚濯既するので、のどが乾いて我慢がでなくなる、ちょうどいい塩梅に飲んでから出かけよう、と彼女は言った。

実際、早魃の七月に、私はお湯など飲みたくはなかったし、ましてやお茶の味を味わうなど論外だ。しかし、私は栄巧を喜ばせたいと思つたので、ちょうどいい塩梅にお茶を三杯飲んだ。そして私たち二人はようやくディーゼルオイルの入った桶を二人で持って、カンテラを上げて、私たちのトウモロコシ畑に向かって出発した。

畑は遠かった。四キロ離れている。栄巧は、持って運んできたディーゼルオイルの桶を肩に担ぐほうが楽だからと提案した。私のほうが栄巧より背が高いのは明白なのに、彼女は私が前で、彼女が後ろだと言いつ張つた。少し歩いただけだが、ディーゼルオイルの桶がちよつとずつ彼女の胸のほうに移動していくのに私は気がついた。

道は平らではなかった。私が前を抜き足さし足でのろのろとした足取りなのに、栄巧はカンテラをさげていたにもかかわらず、明かりをつけようとしなない。私は歩くのをやめて、顔を後ろに向けて彼女に言った。

「小巧、明かりをつけて、道を照らそうよ！」

「ゆっくり歩けばいいべ！カンテラの油は濯既用だべ、んだがら道を照らす分は買ってきてねえんだ。本物の百姓は、明かりをつけては

道を歩かねえもんだ！」彼女の声が暗闇の中でこだました。

彼女のその言葉を聞いた私は、ぐうの音も出なかった。栄巧の話が人を黙らせるというのは、やはり本当だった、と考えただけだった。

しかし、栄巧に黙らされてからは、何だか足元が安定してきたようだった。私は「本物の百姓は……」という栄巧の言葉で、自分自身をひそかに励ました。すると、夜道はわりに穏やかに後方へ退いていった。

「二升は？」と私は歩きながら栄巧に聞いた。

「あいつは、ぼろ時計だ。定めなしだべ！」栄巧のこの言葉は、いくぶん具体的だが、しかし私にはまだ「あいつか、あいつか」の根拠がはっきりわからなかった。

ポンプ井戸のところに着くと、果たしてポンプ係の二升の姿はなかった。栄巧はいらいらしてディーゼルエンジンをさわりながら何度もその回りをまわった。そして、私をポンと押して、言った。「ここで待つてろや。おらは村に戻ってあいつを捉まえてくるから！」私は言った。「片道四キロもあるんだから、私たちは一休みして待つてもいいんじゃない。いずれにしろ彼は来なくちゃならないんだもの」意外にも、私のこの言葉は、栄巧を激怒させてしまった。彼女は私を怒鳴った。

「あんたも待ち、おらも待つてたら、さぞかし北西の風をたらふく食えるべなあ。そんならおらたち二人で首を長くして待つてたらよかんべ。あんたは一日中会議ばっかしやってよ、作物をこんなふうにぐったり萎れさせちまってるのが目に入らねえのか。手をあげて、走資派打倒と叫び、その二枚の唇をぱくぱくさせるのが革命だつてのかい？あんたは高校卒業したんなら、そこんところをちよつくら教えてくれねえか」彼女の最後の言葉が私への問いで終わるなんて意外だつ

た。私がどうして即答できよう。しかし、彼女は私の返答を待たずに、シャベルをズブツと地面に突き立てると、いきなり暗闇の中を、村めがけて突き進んでいった。

ところが、何歩か進んでから、彼女はまた踵を返して駆け戻ってきて、声をひそめて私に言った。「いそいでポケットを開けるや」そう言いながら二三度何かを掴んで私のポケットに入れた。そしてまた言った。「新鮮なのを食つてよ。腹がへつたら二三個ずつ食つてよ、ガッペーと音をたてたら肝っ玉がでかくなるべえ！」そう言うのと、闇夜へ消えていった。私は手探りしてみた。なんとポケットの大半をトウモロコシの粒が占めていた。口の中に放りこみ、食べてみると、油でいつてあった。美味しくて、サクサクした。

暗闇の中、この果てのない平原に、私ははじめて一人でこの深いトウモロコシ畑の番をしたが、なぜか恐くなかった。誰かが私の肝っ玉を太くしてくれたのだろうか？この香ばしいトウモロコシの粒か、それとも栄巧が力をくれたのかしら？私は美味しそうに噛んだ。栄巧がさきほど言った言葉を咀嚼するように、その言葉の道理を咀嚼するうちに。

栄巧が言っていた、会議はつかしやつてるというのは、言うまでもなく近ごろの批判会や批闘会を指している。しかし、人民公社が開いた最近の何回かの会議に、私は全部出た。というのは、人民公社が次のような根回しをする人がいたからである。すなわち、さらに日照りがつづいても、生産で革命を押しつぶしてはいけない、走資派が倒れなければ、作物が成長しても、それは資本主義によるものなのだ、と。半日の会議に出れば、一日分の労働点数を与えるし、もし婦人が子供を連れてくれば子供の分も与えることにすると、大隊のある幹部がそ

れにつづけて言った。私は労働点数を多く稼ぎたいと考えたのではないし、会場で大声をあげようとも思わないし、ましてやそんな可笑しな点数のつけかたは嫌いだ。しかし、回りのよくない意識に感染されたためか、私は農村に來たばかりなのだから、いつでも用心深く行動すべきで、何をするのも大隊の言う通りにすべきだと考えた。栄巧は公正で率直であり、彼女の言うことも同意できるけれど、でもこんなふうに衝突してばかりでは、やっぱり彼女のことが心配になつてしまふ。

こんなふうには、漆黒の夜に、自分のことや、栄巧のことを考えた。考えているうちに、身体が冷えてきて、早く栄巧が来てくれないかと思わず村のほうを眺めやった。突然、村のほうから流星がこちらに向かって飛んでくる。「おーい、おーい」と叫ぶ声も聞こえた。あれは栄巧がカンテラをさげて戻ってきたのだ。私はすぐに嬉しくなつて、身体の寒気も消えてしまった。さらに近づいてくると、彼女はカンテラを高くかかげて私に向かってぐるぐる回した。そのカンテラは、キラキラと揺れ動く花のように見えた。

「あのねー。道を照らす分の油は買ってないんじゃないの！」私は彼女が言っていた言葉を彼女に叫んでやった。

「待ちくたびれてるんでねえがと心配してよ、村を出たらまずはおんたに知らせるべがと思つたんだべ！」彼女はそう言いながら、もうポンプ井戸の傍らに立っていた。注意して見てみると、彼女はポンプ係の工具を全部持つてきており、おまけに首には吸い上げポンプ用のベルトまで巻きつけていた。

「二升は？」私は聞いた。

「あいつなら、おらたちだって、こっちから願ひ下げだ！」と彼女

は言いながら、ドタツ、ドタツと手に持っていた物を地面に置いて、ベルトを私に渡して言った。「取り付けて！」

「二升は？」私はそう言いながらベルトを取り付けた。

「走資派を砲撃するための原稿を書くんだとよ、明日は公社へ発言しにゆくんだとよ。何を言っても来やしないんだ。あいつの勝手にしやがるがいいべ。回してくれや！」

私は地面からクランクを拾いあげると、何回か回してみた。しかしかからなかった。栄巧は「どれ！」と言って、クランクを受け取ると、雑作もなく、ポンプはまるで栄巧に喝采を送るかのようになり、唸りだし、きれいな水が広いうね溝の中に勢いよく流れていった。私はすばやくシャベルを取って、水の頭を追いかけてしようとしたり。ところが栄巧はまた私を呼び戻し、私の足のビニールサンダルを指差して言った。

「サンダルじゃだめだ。ハマビシの茎が突き刺さっちゃうべ。これを履きな！」そう言いながら、彼女は自分の布靴を脱いだ。それからシヤベルをさつと手に取ると、はやくもうね溝をたたきながら前方を駆けていた。

水は、私たちが呼び覚ましたかのような水は、それぞれの畦口からあふれだし、また新しい一区画の土地を満々に注いでいった。

夜もふけて、栄巧は手近にあった大きなトウモロコシの葉を何枚か引き裂いて使用していかないうね溝の中に敷いた。それから彼女の大襦オビ「裏地のついた上着」を脱いでその上に敷いて言った。「ほれ。あんたのオンドルができたぞ。あんたは夜明ししたことがなかんべ。ちよっくら寝てろや。何かあったら起こすからよ！」

……  
空ははやくも明るくなった。私は夜の長さを短く感じた。

翌日の早朝、私たち二人が昇ったばかりの朝日に向かって髪を梳いていた時、二升が自転車漕いでこちらにやってくるのが見えた。彼はつんのめるようにして一漕ぎ一漕ぎ猛烈な勢いでペダルを踏んでいた。着ていたピンクのランニングシャツが見え隠れしていた。遠くから見ると、まるで羽をすぼめ、作物をかすめて飛ぶ赤腹の小鳥といったところだった。

二升は一年前は村の高校生だった。お洒落好きな青年だった。そのピンクのランニングシャツは、彼の兄からもらったものだった。シャツに芸校と白く二文字プリントしてあるのが気に入ったのである。彼も能弁家である。とくに知識青年と話をするのが好きだった。相手が北京人なら、北京語で受け答えするし、天津人なら、天津方言を使いこなすことができた。老支部書記が走資派だとレッテルを貼られた時から、彼は会議で積極的に発言するようになった。

栄巧は二升がまもなく畑の縁まで近づいたのを見るや、いそいで腰を屈めた。それから私を作物の中へぐいとひっぱり、隠れさせた。しかし、二升はやはりまず自転車を畑の縁にとめて、ハンカチを取り出し汗をふくと、畑に向かって北京語で話した。

「君たちに通知するぞ。おい！一日中会議を開くことになった。弁当は持参すること。労働点数は二人分とする。行くか行かないかは、君たちの自由だ。しかし、後のことを考える必要があるぞ！……行かない者は他人に影響を与えてはいけないぞ！」

二升は言い終わると、一瞬、私は躊躇した。行かなければ、会議を招集した幹部たちにどんな印象をもたれるだろうか？私のはのろりと立ちあがって、畑の縁を眺めた。栄巧は私が二升のほうを眺めているのを見て、冷笑しながら私をポンと押して言った。「行きな。すんば

らしいなあ。(二等)に乗れるんだがなあ!」

栄巧の言葉はまた私にぐうの音も出せなくさせてしまった。とはいえ、私はやはり事後の問題を考え続けていた。私は声を押し殺して彼女に言った。「もしなんなら、私たち二人で行きましょうよ」栄巧は私を無視して、身体をスックとのばして、トウモロコシの茎の間から跳びあがった。彼女は腰に手をやりながら、うね溝のうねに腰に手をやり立ちどまり、大声で言った。

「誰からの通知でも、くそつたれのでたらめだ!おらよりも、まっずはじめにおらのディーゼルエンジンに声をかけてみたらよかんべ。機械が行くと言えば、おらもあいつとお手手つないで走資派を批判しにゆくがのう。んだが、機械が何にも言わなかつたら……ペえっ!だ」彼女は憎々しげに唾を吐いた。真つ白な唾は、楽しそうに笑っているうね溝の水の渦巻きに沿って飛ぶように流れ去った。彼女はまっすぐ二升を睨んでまた言った。

「恥ずかしくねえのか。機械がおまえを呼んでるのに、おまえは聞こえないふりをしてる。おらは呼ばれたら、返事をしないわけにはいかねえ。人が離れて、機械が止まったら、おらの棉花はどうなるべえ?おらのトウモロコシはどうなるべえ?隊の指示でおらは灌漑してるんだ。この機械も、この畑も、この水もおらが管理してるんだぞ!おらは、あんたらのあの恥知らずの労働点数なんかありがたくもなんともねえんだがなあ!」

二升は自転車に寄りかかり、片手を腰に当て、片手でタバコを挟んでいた。その姿から、話に割りこみたいということがわかったが、栄巧にやり返すきっかけを封じられていた。いま、栄巧の話が一段落したので、二升は近づいてきた。彼は吸いかけのタバコの吸い殻を畑に

投げ捨てた。かなりに自制心を持って、言った。

「王栄巧。おれたちには恨み辛みもない。おれは批闘会を知らせに来たんだぞ。もう一度はつきりさせておくが、批闘会だぞ、普通の会議じゃないんだからな」

二升が批闘会だと言うと、意外なことに栄巧の声がさつきより高くなった。

「批闘会なら、おらは批闘会のことについてだけ言わせてもらうべか。あんたらは舞台の上で、どんなに高く地団駄踏んだり、道路でどんなに高らかに罵っても、その力はどこから来るんだべがな?食ったり飲んだりして来るんでねえのが。食ったり飲んだりする物はどこから来るんだべなあ?畑から育つんでねえのが。あんたに三日も飯をやらなけりや、跳んだりはねたりできるもんだがなあ。あんたに言うけど。それが道理つてもんだよ。おらには文章を作るような腕前はねえし、そんな暇な時間もねえんだ。そうでなかつたら、とつくに腹の中にある話を書きあげて、どーんと大字報にして貼りだしてやるぞだ!」

二升は栄巧の剣幕がさらにすさまじくなったのを見て、「おまえは」と言うのと、すぐに自転車を押して立ち去ろうとした。ところが、栄巧の話はまだ終わっていなかった。

「おらが、おらがどうしたつて?おらよりは、あんたが革命したほうがいいんだべ。あんたが革命するなら、おらの話をあんたの上司の幹部に聞かせてやれや。最後に甜村の王栄巧が言ったと付け加えてやらなくちゃな!」

二升は両手でハンドルをつかんだ。しかし、やはりどうも栄巧に反論できないままではいられないらしく、首をのばして栄巧のほうを向

いて息を吐いた。思いもしなかったが、栄巧の話はまだ終わっていない。終わった。

「どうしたんだべ？あんたはなんでまだ行かないんだべな？あんたはそのばか首を伸ばしてこっちを見ることはねえんだがのう。おらたちはまちがいなく行かねえけど、恐くはねえんだがらな！」その時、栄巧は腕を空中でぐるっと回した。まるで、これで二升との話し合いは完全に終わったという具合に、大きな句点を描いてみせたかのよう

に。  
二升はまた小鳥のように、翼をすぼめて飛び去った。辺りはしばし静寂がつづいた。まるで原野全体が、彼女の話に静かに耳を傾けながら、栄巧の言葉の中から原野に対する慰めを得るのを待っているかのような静寂だ。

その日、私は会議に出かけなかった。

次の日の夜が来た時、私と栄巧はまた残業を要求した。私たちはびったりくっついてすわった。水滴のついたトウモロコシの葉がたえず顔や鼻の頭を掃いていたことよって、私は周囲のすべてのものがいっそう清々しく爽やかに感じた。サラサラと音をたてて、勢いよく流れて行く眼前の緑色の波を見て、私は思わず立ちあがって、朗唱した。

「私はこの緑なす海原を愛す……」

「ふーん。あんたは海を見たことがあるんだべなあ？」栄巧は突然私の腕をつかんで聞いた。

「ええ」私は腰をおろして彼女に答えた。

「端っこは見えるんだべがのう？」

「見えないわ」

「そんなに、そんなにたくさん水を灌漑したのだから？海は裂け

目から漏れてゆかねえんだべが？」栄巧は目を丸くしてまた聞いた。  
可笑しなことを聞くものだ、私は思った。でも、栄巧の真面目な顔を見ると、ちっとも可笑しな質問ではないと思った。彼女は思案しながら、私に対するかのように、そして眼前のこの広大な平原に対するかのように、厳かに言った。

「おらたちに、もしも海くれえ、うんとこさ水があつたらよかんべなあ。海が裂け目から漏れていっても、おらたちは恐くねえ。おらには力があるから、塞ぐことができるはずだ。あんただっておらの手伝いができるべ。命懸けてもやってやるべ！」彼女の声はふだんよりずっと低かった。しかしその言い方は実に真摯で、重々しかった。

栄巧が話をしていた時、畑の畔道から栄巧を呼ぶ隊長の声が聞こえてきた。私たちは呼ぶ声のほうを見た。暗やみの中で一筋の煌めく星たちが跳びはねていた。それは、隊長がこの畑に超過勤務で加勢に引き連れてきた、娘たちのカンテラ部隊だった。栄巧は大声で返事しながら、私に言った。「行くべ。行ってあの人たちを出迎えるべ！海が裂け目から漏れていっても恐くねえと言ったべ。おらたちには、こんなにたくさんさんの働き手がいるでねえが！」私はびったりと栄巧の後ろについて、彼女の後ろから狭い溝のくろの上を走った。足元ではたえず土くれが水の中に落ち、心地よい音をたてた。夜道を歩きなれたのを得意になっているまさにその時、私は思わずすと足が滑って、片方の足を水の中に落としてしまった。

「きゃあ！」私は叫んだ。

「うすのろ！」栄巧は笑い声を押し殺してそう言う、手をさしおべて私をぐいとひっぱった。

本当に、いまようやく、私ははじめてはっきり見たのだ。暗い夜の

周囲のすべてを、うね溝の水がこんなに透き通っているのを、銀色の月の光が私たちの影の後から、うね溝の中をひた走っているのを……

一九七八年三月

### 原注

①（二）：人が自転車の荷台に乗ることを、二等に乗るといふ。

### 訳注

(1) 夜道(原題「夜路」)：「夜路」は月刊「上海文芸」七八年五期に掲載された。この作品は、掲載後ただちに上海の先輩作家・茹志鵬に評価された。茹志鵬は「一九七八年八月十五日」に書いた「夜路」の読後「読疑的『夜路』以後」を、「河北文芸」七八年十期に寄稿した。以下、簡単にこの読後感を紹介しよう。

茹志鵬は冒頭で「まず私は、鉄凝同志が『上海文芸』に発表した「夜路」を読むことができて嬉しかった。その後、作者が若く、挿隊した女性知識青年だと知ってもっと嬉しくなった。というのは、中国の女流作家は多くはないし、とくに若い作家は多くないからである」と述べた後、「夜路」の対話の妙を指摘している。

栄巧が「私」をお茶で接待する場面である。「何をしたか」だけでなく「どのようにしたか」により人物の性格が表現されるとエンゲルスが指摘したように、鉄凝は栄巧のお茶による接待を、どのようにお茶で接待したかを描いた。「対話の中に人物や性格や思想・感情を表現しなくてはならない」が、それがこの場面では成功している。「おらんちにはねえんだ。おらの家にあるのは、一包みのお茶だ」(我門没有、我們有包茶葉)の十文字には、「栄巧の誠、真、実が浮き彫りになり、いわゆる栄巧の話が「人を黙らせる」実質が浮き彫りになっている」という。次に、「栄巧と英雄人物の規格」について述べる。栄巧の「人を黙らせる」行為、一回目は道を照らす明かりの節約、二つ目は畑に着いて、二升を迎えにくかどうかの議論、二回目のは「黙らせる」に止まらず「怒り」と「罵り」となる。「怒り」「罵り」の対象は「四人組」の一派

である。一回目は「私」の「有形の道」の導き、二回目は「無形の道」の導きである。そして、二升が会議を誘いに来た時には、単に「私」を導いただけでなく、「彼女は手でひっぱった」。栄巧は道案内だが、英雄ではない。彼女にはいくつかの行為や性格の上で欠点がある。しかし、その欠点は個性である。ここでいう英雄とは、「四人組」統治下の十数年の規定による英雄である。つまり、「時代の先声、階級の代表、党の化身」として「原則に合致し、政策を体現する」英雄である。英雄の形象の難しさは、具体的な個性をもたせることであるが、「四人組」時代の「模範」的英雄には個性がなかった。「生活の中の英雄人物は、まさに先進的であるがゆえに、よりいっそう平凡で普通で誠実で素朴であり、その性格はそれぞれ異なっている。しかし一つの共通点がある。それは特殊化されていないことである」。

「創作と生活」ではこう述べる。鉄凝の四作品「会飛的鎌刀」「火春児」「薬子の隊伍」「夜路」は、「すべてが完璧であるわけではない、思想の深さでも一定の水準に達しているわけではない。彼女はまだ若いし、創作上ではまだ歩きだしたばかりの段階だ。しかし、彼女の作品から、彼女の生活に対する熱く真面目な態度が見いだせる。

「私は「夜路」がすでに完全無欠だと言っているのではない。彼女のそれまでの作品と比較すれば、この作品で、鉄凝同志はたしかに創作上で重要な一步を踏み出したと言える。前の三篇でもいきいきとした児童の形象を創造したが、人物や主題がわりに単純であり、あるものははだしく単純で図式的すぎる欠点がある。たとえば「薬子の隊伍」だが、(中略)これら三篇と比較して、「夜路」の主題、人物はどちらもずっと微妙で複雑であり、ずっと深い。「夜路」は開始されたにすぎない、今後の道中には、まさに百花開き春常在に在るだろうし、さらなる深さと重さをもった作品を書いてくれるだろうと信じる。お互いに頑張りましょう！」

以上が茹志鵬の読後の紹介である。「夜路」には光る描写がある。それはいきいきとした栄巧の態度、言葉(対話)に表現されている。このような先輩作家・茹志鵬の擁護、後押しは、鉄凝にとって大きな励みであり、作家としての自信につながったろう。「夜道」の対話の妙について、李子云は「致鉄凝——關於創作的通信——」(八四年一期「当代作家評論」)で、「私」が栄巧の家に立ち寄ることを約束する場面を引い

て、対話により登場人物の性格を描き分けていると指摘した。

働く農民、労働への信頼。村の娘の純粹さ、大地に根付く確かさ。労働の喜び、挿隊した知識青年「私」の自信。農村の夜道の歩き方を教えてもらった私の体験記。栄巧との出会いを、農民の娘・栄巧の発見を描いた。

灌漑班での灌漑の作業の題材は、やがて「棉花の山に寝転んで」にも使用される。「夜道」末尾の娘・栄巧の純粹さと応援団の娘たちの出迎えの場面は、「おお、香雪」のラストシーンの発想を導くものである。なお、映画「おお、香雪」のラストシーンの発想（細い木にマッチで火をつけ、松明として、それを振り回しながらトンネルに向かって走る場面）は、「夜道」の中で、栄巧がカンテラをさげてぐるぐる回した場面（雑技の中にも類似の技がある）を採用していると思われる。